竹島渡航日記（二）

旅行者　某生

一筆紺青を以て染めた樣な八尾川と突兀飛龍の如き城山の景は實に海邊にあろうとは思はれない程に幽邃である此珍らしい西郷裏面の風色があるのまかゝはらず夫れとは相反した士女の裏面は紛々厭ふべき卑猥なる花討り咲き乱れて居るので城山は爲めに泣いて居るであろう此山を洗ふ所の八尾川は潺々として流れて有名なる隱岐杉を下方に輸すのである杉の筏に乘して掉すところの樵夫は誰か以て嵐峽を思はないものかあろう、

八尾川に沿ふて隱岐には割に大きい所の八田農事試驗場がある支場長の田中君は例の熱心家として昆虫の標本などよく整理せられた又清き川堤に新たに三樫を植えられたが此時花既に待ち飽きたと云ふ所であつた之は面白き趣向と思はれた、

西郷灣を縱斷し舟を乘して東半島を横きり男池を通過して馬蹄石の産地を取調べに行きた人もあつたが實に其累々たる赤色のたつふらしき石英粗面岩の中に黑色鼠色などの馬蹄石が點々象眼せられて居たるは慾あらぬ人までも絶壁に爭はしめたのである馬蹄石の近傍に男池とて一寸奇麗なる堤の樣な水溜りがある之は普通にある所の池の樣に窪池に水が渚涯したのではなくつて全く石見の波根湖や鳥取の湖山池などと同し成因であつて海邊の潟と稱すべきものである此池が荒い所の日本海の波を砂や小石を運んで障壁を作つたから出來たものである若し波の洗ふものがなく谷より水の落つるものでなかつたならは只小さき内灣となつたのであろうが兎よ角此男池は普通のものとは異なつて砂の代りに小石を以て塞けられた所が此附近では一寸珍らしいと云つて宜しい、

男池の附近を徘徊する内に一陣の風は吹き來つて今や花盛りである所のちんちやうげの自生を知らしたのは實よ其日の樂みであつたされとも此匂ひを送る所の風こそ長らく西郷に我々の足止めを命したれを花が罪かの樣に折角取つた所のものまで拋け棄てたのである、

山陰新聞（現山陰中央新報）
1906年04月06日